

令和7年度伊勢原市総合教育会議議事録

令和7年12月19日（金）午後1時30分から伊勢原市総合教育会議を伊勢原市役所議会全員協議会室に招集した。

[開催日時] 令和7年12月19日（金）
午後1時30分から午後2時53分まで

[開催場所] 伊勢原市役所 3階 議会全員協議会室

[出席者] 市長 萩原 鉄也
教育長 宮村 進一
教育長職務代理者 濱田 光子
委員 福田 雅宏
委員 桑原 公美子
委員 長塚 繁昭

[事務局] 教育部長 熊澤 信一
歴史文化推進担当部長
（兼）歴史文化担当課長 立花 実
学校教育担当部長 今井 仁吾
教育部参事（兼）教育総務課長 瀬尾 哲也
教育総務課施設担当課長 畠山 純徳
教育部参事（兼）学校教育課長 守屋 康弘
教育指導課長 西野 厚志
教育センター所長 田中 美和
社会教育課長 青木 優
教育部参事（兼）図書館・子ども科学館長 林 かをり
教育総務課係長 窪田 暁大

[市長部局] こどもみらい部長 山田 泰生
こども家庭相談課長 高木 亜佐子
こどもみらい部参事（兼）こども若者支援課長 増田 啓介

[有識者] 認定NPO法人地域福祉を考える会いせはらフリースクール風の谷
代表 時乗 洋昭
IDEAコミュニティカレッジ
代表 矢野 梢

[公開の可否] 公開

[傍聴者] 15人

[経過] 次のとおり

----- ○ -----

開会

○教育部長【熊澤信一】 それでは、定刻になりましたので、ただいまから令和7年度伊勢原市総合教育会議を開催いたします。

会議は、次第に従いまして進行してまいります。よろしくお願いいたします。

----- ○ -----

挨拶

○教育部長【熊澤信一】 それでは、早速ではございますが、次第2「挨拶」でございます。まずは、萩原市長より御挨拶をお願いします。

○市長【萩原鉄也】 皆様、改めまして、こんにちは。伊勢原市長の萩原でございます。

本日は、令和7年度の伊勢原市総合教育会議にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

教育委員の皆様におかれましては、日頃より本市の教育行政の推進に御尽力をいただきまして、誠にありがとうございます。

さて、本市には、設置する小学校10校、中学校が4校ございまして、今年5月1日の時点で、計6,742名の児童生徒が在籍をしております。明日の伊勢原、あるいは、明日の日本を担う大切な、大切な子どもたちです。

そして、この子どもたちを導く先生方、市で採用した非常勤講師や栄養士、調理員、校務整備員、介助員、指導補助員を含めて計638名の方々が、それぞれの校長先生の下で、日々、献身的に子どもたちの学びを支えております。

さらに、各学校では、多くの保護者や地域の方たちが、ボランティア等で学校を支えてくれています。学校の元気が子どもたちの元気へ。子どもたちの元気は地域の元気へとつながる、そんな好循環を生み出したいと願っています。

さて、昨年度の総合教育会議では「きめ細やかな教育の推進」というテーマのもと「個別最適で協働的な学び」「小中一貫教育」「特別支援教育」の3点について、協議を行いました。

そして、その協議が、現在、パブリックコメントを実施中の「伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する基本方針案」につながったと承知しています。

今回の協議テーマについては、教育委員の皆様と、今後の学校教育の在り方について、議論を深めるうえで欠かせないものと考え、「不登校を考える」としました。皆様には、今回の会議も有意義なものとするため、忌憚のないご意見をいただけるようお願いし、私からのあいさつとさせていただきます。結びとなりま

すが、皆様の今後ますますの御活躍と御健勝を御祈念申し上げまして、御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく申し上げます。

○教育部長【熊澤信一】 ありがとうございます。

続きまして、宮村教育長、お願いいたします。

○教育長【宮村進一】 皆様、こんにちは。

この4月に、教育長を拝命しました宮村です。私にとって初めての総合教育会議になります。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、萩原市長には、学校教育、そして、社会教育の充実振興、また、文化財の保存活用など、教育行政全般にわたり多大な御配慮をいただいていることに対し御礼を申し上げます。

私自身、10年ぶりに伊勢原市で仕事をする中で、改めて実感していることが2点あります。

1点目はスケールメリットです。小学校10校、中学校4校、教職員が学校の枠を超えて一体となつてことを進めるのに絶好の規模感だと感じています。

2点目は、学校と地域との顔の見える関係です。昔と変わらず、多くの地域の方がいろいろな場面で当たり前のように、学校、あるいは、子どもたちの支援に当たってくださっているということ。この2点は、伊勢原ならではの特徴、強みであると実感しています。

一方で、本市においても、喫緊の教育課題が山積しております。中でも、本日の協議テーマである不登校は、これからの学校教育の在り方、あるいは、やり方自体を見直すべき最重要課題だと捉えています。萩原市長には、今回この不登校をテーマに選んでいただいたことに重ねて感謝を申し上げます。

少子化が進む中ですが、誰一人取り残さず、全ての子どもへの自己肯定感を高め、その意欲や元気を培っていくことは、義務教育を担う公立小中学校に課せられた本来の使命です。その意味も込めまして、現在、パブリックコメントを実施しております「伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する基本方針（案）」では、本市が目指すこれからの学校像として、多様な人や社会との関わりの中で、児童生徒一人一人の可能性を引き出す学校と示しております。

この実現に向けては、萩原市長をはじめとした市長部局のお力も大いに借りながら、引き続き、学校教育を支えていく所存です。

本日の総合教育会議では、この転換期にある伊勢原の学校教育の今後の姿について、市長と教育委員会が直接語り合える貴重な場だと考えております。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

○教育部長【熊澤信一】 ありがとうございます。

----- ○ -----

協議事項「不登校を考える」

(1) 基調説明

○教育部長【熊澤信一】　　続きまして、次第3「協議事項」に移ります。ここからの進行につきましては、関連要綱の規定に基づきまして、萩原市長にお願いをいたします。

○市長【萩原鉄也】　　それでは、早速議事に入らせていただきます。

本日のテーマは「不登校を考える」です。

子どもの数が減る中でも不登校の数は毎年増え続けています。全国だと35万人以上、本市でも、小学校が94人、中学校が141人、大体合計で235人ぐらいです。これは、今分かっているだけです。実際には、もっと多いのではないかと思います。このテーマ、この状況を踏まえて、これからの学校教育の方向性を見通すために提案するものです。

また、本日のこのテーマの下に、欠席が続く子どもやその保護者の不安が少しでも和らぐために必要なこと、そして、もう1つは、どの子どもも元気・意欲を培うことができる「これからの学校」に必要なこと、という2つの論点を設けて、委員の皆様から幅広く意見を頂戴したいと考えてございます。

それでは、事務局より不登校の基本的な捉えと今後、現状と課題について、資料説明をお願いいたします。

○学校教育担当部長【今井仁吾】　　学校教育担当部長の今井です。私から、不登校の基本的な捉えと、現状と課題について御説明をいたします。

資料を御覧ください。基調説明、不登校を考える会議資料、1ページでございます。

初めに、基本的な捉えということで、ページの左側上段、(1)①不登校の定義等を御覧ください。

国では、年間30日以上欠席をする長期欠席の子どものうち、病気やけが等に当てはまらず、何らかの要因背景により、欠席が続くケースを不登校と定義をしております。

不登校は、発達や精神といった内面的な課題、虐待、貧困等の家庭環境の課題に加え、学習や人間関係といった学校生活上の課題など、多様な要因背景により、結果として不登校状態になっていると考えられております。

また、国は以前こうしたケースを学校嫌いや登校拒否と称していましたが、状況をできるだけ限定せず客観的に示すために、現在は不登校という名称を正式に用いております。

次のページの右上、②基本的な捉えでございます。国は、法令等の中で、不登校の基本的な捉えとして、不登校は取り巻く環境によっては、どの児童生徒にも起こり得ること、その行為を問題行動として判断しては駄目だよと、不登校児童生徒が悪い、例えば、甘え、怠け、弱いといったような根強い偏見を払拭すること、と示しております。

さらに、国からは、不登校の期間が休養や自分を見詰め直す機会とプラスに捉え、学校に登校するという結果のみを目標にするものではないとされる一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益等のリスクが存在することに留意をし、将来の社会的自立へ向けた継続した支援を行う必要があるということが示されております。

続いて、(2)本市の現状と課題でございます。1ページ下段を御覧ください。

①不登校の状況でございます。右のグラフでもお示ししたとおり、不登校の児童生徒数は、この10年で、小学校が約5倍、中学校が約2.4倍に増加をしております、特にコロナ禍以降に急増しております。

また、グラフにはお示ししていませんが、令和6年度の全児童生徒数に占める不登校児童生徒の割合は、小学校が2.34%、中学校が8.26%でございます。小学校につきましては、1学級に0人から1人の割合、中学校では1学級に3人から4人程度という割合となっております。

また、学年別に見ますと、小学校1、2年生という早い段階で、長期欠席となる児童の増加が顕著な状況です。

さらに、欠席日数別に見ますと、年間の授業日数の約半分に当たる90日以上欠席する子どもの割合は、不登校の児童生徒数のうち、小学校が約45%、中学校が57%となっております。つまり、不登校の全てのお子さんが全く学校に行かれていないというわけではございません。

次に、2ページを御覧ください。

ページの左上、②取組の状況です。まず、継続支援の観点から、既に不登校の状態にある子どもへの支援として、学校では電話連絡や家庭訪問、ICT活用等により、教育相談や学習支援を実施しております。また、市では、教育支援教室「やまどり」や「アオハルルーム」等の居場所、学びの場を提供しております。さらに地域では、フリースクール等の民間団体による居場所や学びの場の提供が始まっております。

次に、未然防止①早期対応についてです。休み始めの早期対応の観点から、困難を抱える子どもへの支援として、学校及び市教委では、教員や指導主事、SC・スクールカウンセラーやSSW・スクールソーシャルワーカー等がチームで支援に当たる体制を整え対応しております。また、学校では、学級以外の別室を活用し、個別の教育相談や学習支援を実施しております。

さらに、未然防止②ですが、全ての子どもたちにとって魅力ある学校づくりの観点から、子どもの意欲・元気を培うために、学校では、日々の授業や諸活動の充実に向け、指導法の工夫、改善に努めております。

また、市教委では、非常勤講師や指導補助員、介助員の雇用などにより、学校を取組を後押ししているところです。

こうした取組を進める中、ページ右上の③課題でございますが、まず、継続支援の観点からは、支援や学びの場につながっておらず、不安や混乱を抱えたまま欠席が続くお子さんや保護者の方が多く存在、いらっしゃるという事情がございます。このことは、後ほどお話をする本日の論点Aにつながるものです。

次に、未然防止の観点からですが、調査結果では、不登校でも様々な支援を受け、学校へ通えるようになったり、状況が改善したりする児童生徒が着実にいる一方で、毎年度新たに不登校になる児童生徒がその数を上回っており、結果として、不登校の児童生徒数が増加する状況となっております。

また、全国学力・学習状況調査の質問紙調査では、自分にはよいところがあると思いますかという設問に対し、8割から9割の児童生徒が肯定的な回答をしている一方で、逆の言い方をしますと、自分にはよいところがあるとは思えないと回答する児童生徒が1割から2割いるということも実情です。このことは、本日の論点のBにつながっています。

このようなことを踏まえ、伊勢原市としても、不登校対策は、既に不登校の状態にある子どもへの支援に加え、新たな不登校が生まれえないような、魅力ある学校づくりが不可欠であると考えております。

そこで2ページの下段の(3)本日の論点です。

こうした本市の現状や実情を踏まえ、今後の施策につなげるために、今後に向けた課題や、皆様から御意見をいただきたい論点が次の2点です。

1つ目は、継続支援の観点から「A、欠席が続く子どもやその保護者の不安が少しでも和らぐために必要なこと」についてです。

2つ目は、未然防止の観点から「B、どの子どもも元気や意欲を培うことのできるこれからの学校に必要なこと」についてです。

協議に移る前に、ここで情報提供をさせていただきます。本日は、地域で不登校の子どもたちの支援に当たっておられますお二人の方をお招きし、情報提供をお願いしております。御紹介いたします。

認定NPO法人地域福祉を考える会「いせはらフリースクール風の谷」の代表でいらっしやいます時乗洋昭様です。

そして、もうお一方「IDEAコミュニティカレッジ」の代表でいらっしやいます矢野梢様です。

近年、市内や近隣の地域にも、お二人が運営するフリースクールをはじめとして、生きづらさを抱える子どもたちの様々な学びの場、居場所が、民間の方たちによって開設され、伊勢原の子どもたちの利用も始まっております。こうした居場所を運営するスタッフの皆さんによる子どもたちとの関わり方は、不登校の子どもだけではなく、学校での全ての子どもたちにとって欠かせないものと考えております。本日、お二人からは、それぞれの活動の御紹介と、協議の論点に関するお考えも伺えれば幸いに存じます。

参考といたしまして、資料3ページ、4ページには、2団体についての内容も記載をしております。

私からは、説明は以上でございます。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございます。ただいま、事務局から説明がございました。

次に、情報提供ということで、お二人には、本日お忙しい中、御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

初めに、風の谷の時乗様、よろしくお願ひいたします。

○いせはらフリースクール風の谷代表【時乗洋昭】 皆様、こんにちは。いせはらフリースクール風の谷の代表をしています時乗といいます。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

着座にて説明いたします。

資料のほうにもありますけれども、私は長く県立高校で勤務をしていました。その中で、一番こういう不登校のお子さんたちと関わり合うようなきっかけになったのが、横浜の泉区に2008年に開校した県立横浜修悠館高校という通信制の単独校でございます。私はこの横浜修悠館の、一応この案というかこれがスタートしたのが1998年なのですけれども、その当時から、この学校の基本的な設計をどうするのかというようなところから関わって、2008年時の立ち上げに向けての実際の準備、そして立ち上げ後、校長としての運営という形で、都合その出発点から考えると15年ぐらい、この学校に関わってきた部分があります。

その中で、実際、不登校のお子さんとか、保護者の方、あるいは、それを支えていられるフリースクール等の様々な関係者の方と、いろいろな交流を通して、ある程度、きちんとした形でこの子たちを見ていかないと、将来的に非常に大きな、こういう言い方をすると不適切かも知れませんが、子どもたちにとってもそうですし、社会にとっても一つのリスクになるような、そういうような印象を持っていました。

その横浜修悠館が終わった後も、この画像にありますように、秦野高校とか湘南高校とか、私立の山手学院中学校・高等学校とかというところで勤務してまいりましたけれども、そういったところが一段落した2年前に、その当時、横浜修悠館で思っていたことを何とか実現していきたいという思いで、たまたまこの伊勢原にありますNPOの地域福祉を考える会の方と知り合うことができて、そこに、こういったフリースクールをというふうなことで、お話を差し上げたところ、それだったらぜひ一緒にやっというふうなことで御理解いただいて、今年の6月に開校をさせていただきました。

今日は、この6月に開校して半年足らずですけれども、この半年間の風の谷での子どもやその保護者との交流を通して、私が思っていることをお話しさせていただければ、ありがたいと思っています。

まずは、今回この不登校の問題について、先ほど御紹介いただいた2つの論点を提示されたということに対して、私は個人的に非常に敬意を表したいと思っています。実は、この風の谷が一つのコンセプトとして持っているのが、一つは保護者の支援をどういうふうにしていくのか。あとは、子どもたち一人一人が非常に心地のいい環境の中で学べるにはどうすればいいのか。そういった2つのものを大きなコンセプトとして持っていますので、そういった意味では、今回の論点と風の谷が抱えている課題意識というのは、ある種、通じるところがあるというふうには思っています。

それでは、まず、論点Aについてですけれども、子どもが学校に行かないというふうに言い出したときに、ほとんどの親御さんは、もう勉強どうなるの、この

先どうなっていくの、高校卒業した後のその先は……というふうな形で、すごく不安になられます。それが最初なのです。

その次に出てくるのが、じゃあ家にいる子どもの面倒は誰が見るの、母親の自分が見るの、だったら仕事はどうする、休む、辞めなくてはいけないのというふうな、今度は自分たちの生活への不安というのがそこで出てきます。

その結果、お子さんに、いやいや学校に行けよ、学校に行かなきゃどうするんだみたいな形で、お子さんへのプレッシャーが働き出して、お子さんはなおさら学校に行かないことが、自分だけではなく、親にもとても迷惑をかけて、という形で自分を責めるという、そういった悪循環がそこで起こってくるということがあります。

だからまず、子どもを安定させていくためには、親の不安を取り除いてあげる必要があるというふうに思っています。そのためにも、フリースクールをはじめとした多くの場所以ちきりとした情報を得て、あるいは、自分の気持ちを受け止める、そういった場所を提供していくことが必要になるというふうに思っています。そういった意味で、風の谷では、来年の2月に伊勢原市教委さんとの共催で、進路に関する勉強会を開催していこうというふうに思っています。

ただ、今回は、風の谷と市教委さんとの開催ですけれども、行く行くは伊勢原市内で同一の取組をされている団体さん等と連携するような形でやっていければいいというふうに思っていますし、また、先般、近隣の教育事務所のSSWの方と、お話をする機会があったのですけれども、その際に、こういった不登校に関するいろいろな情報に一番アクセスしにくいのが、経済的に苦しい御家庭だというふうなことも聞きました。だから、行く行くは、そういった福祉関係の方たちとも協働しながら、いろいろな形の情報発信、勉強会、そういったものができればありがたいというふうに思っています。そういうふうにすることによって、本当に必要な人たちのところに確実に情報が届く、そういったセーフティーネットがつけられるものだろうというふうに思っています。ちょっと長くなって申し訳ないです。

その次に、論点Bですけれども、発達障害や発達状況に違いがある生徒にとって、一定の枠の中で、枠にはめられた形で学ぶというのは非常に苦痛に感じるようです。例えば、得意なものは、彼らはとことんやりたいし、好きなものは一生懸命やりたい。一方、嫌いなもの、苦手なものは極力避けていきたいというような傾向を強く持っています。

風の谷では、そういった子どもさんたちに対して、その子の持っている興味や得意に合わせた教材を工夫して、少しずつ学びの場を広げる、そういった働きを、そういった活動をしています。それによって、苦手だったことに少しずつ興味を持ち始めたり、挑戦し出したりするようになっていきます。うまくそこでスイッチが入れば、もう誰の手も借りずにどんどんそういうタイプの子たちは勉強を始めていきます。いわゆる自走をし始めるという形になります。

実際、風の谷で、そういうふうな形でスイッチの入ったお子さんが1人、この12月からですけれども、やっぱり勉強するには学校に行かなきゃ駄目だという

ふうと考えて、自らもう学校に行く決めて、風の谷をやめて、今の学校のほうに復帰をしているというような事例もあります。

文部科学省でも、学びの多様化学校という形で推進はしていますけれども、そういう学校ができれば、それにこしたことはないでしょうけれども、私は、その前に、次期の学習指導要領の中で、教育課程の弾力化というようなこともうたわれていますので、ぜひ各学校で、例えば、学びの多様化活動といった、新しいその教育課程を編成して、本当に一人一人が自分にとって一番いい学びができるような機会というのをぜひ考えていただければありがたいと思いますし、そして、そのための第一歩としては、先生方が活発に議論できたり、あるいは、調整できたり、そういった環境を市教委さんには、ぜひつくっていただきたいというふうに思っています。

さらには、子どもたちは、学校外で本当に様々な活動をしています。そして、挑戦をしています。そういった子どもたちの取組を学校のほうで積極的に評価していただければ、子どもたちの意欲、モチベーションというのも上がってくるというふうに思いますので、その点もぜひ考えていただければ、ありがたいと思いますし、また、そういった、学校外での活動を例えば先ほどの学びの多様化活動などの中を通して、学校の中で活用していただけるとありがたいというふうに思っています。そういった取組が、結果として、学校がみんなにとって楽しい場所、行きたい場所、自分の未来を育む場所、そういったところになるのではないかと、こういうふうに思っていますので、ぜひ御検討いただけるとありがたいです。

長くなって申し訳ありません。私からは以上です。

本日はどうもありがとうございました。

○市長【萩原鉄也】 時乗様、ありがとうございました。

続いて、IDEAの矢野様、お願いいたします。

○IDEAコミュニティカレッジ代表【矢野梢】 こんにちは。IDEAコミュニティカレッジ代表の矢野と申します。よろしくお願いいたします。

まず、最初に簡単に自己紹介させていただきます。私は公認心理師の資格を持って活動をしております。また、教員免許もございまして、一番最初に勤務したのが高校なのですけれども、その高校がいわゆる技能連携校という高校で、不登校経験のある子が8割以上というタイプの通信制をベースにした高校でございませぬ。そこで出会った不登校経験のある子どもたちとの過ごした日々がきっかけとなって今、民間団体として活動しております。

そのほかにも、座間市の家庭訪問相談員ですとか、大和市や海老名市で、心の教室の相談員、別室登校の支援員など担当いたしまして、教育に関する様々な角度から、不登校経験のある児童生徒と関わらせていただきました。

現在は、座間市及び海老名市でフリースクールを運営しております。18年間で500名以上の不登校児童生徒や保護者と関わらせていただきまして、最初関わった生徒は、もう30歳を超えている状況です。今も関わりが多くの子とありまして、どういった人生を歩んでいるのかというところを今も話しながら、見ながら、そういったお話を聞いていて、どんな教育が必要かというところを日々

考えながら活動しております。

I D E A コミュニティカレッジの活動紹介ですけれども、理想の教育の探求と実践というところをミッションに掲げまして、一人一人にフィットして、その子のよさをもっと引き出せる関わり合い、学びの提供というところをモットーに活動しております。

具体的な内容といたしましては、教科の学習ももちろん行いますが、いきなりその段階に立てないお子さんに関しましては、好きなこと、やってみたいことをきっかけに、まず、来てみるというところからサポートしております。

例えば、昨日1日の出来事と言いましても、1人の子は、中学3年生の生徒で、ちょうど高校受験の合格発表の日でした。そういった日を過ごしている子もいれば、また、別の子どもたちは、カラオケ行こうという講座で、每学期末定番なのですけれども、みんなでカラオケに行っていました。カラオケにただ行くだけではなくて、どこのカラオケに行くか、何時間いるのか、幾らかかるのか、何時に待ち合わせしたらいいのか。そういったことを、みんなで調べたり、合意形成するというところに、学びのポイントを置いております。簡単ではございますが、こういった活動を日々行っております。また、保護者の支援にも力を入れております。

では、早速論点につきまして、情報提供をさせていただきたいと思っております。

まず、論点Aについてです。

資料にございますが、1、2、3の順でお話しさせていただきたいと思っております。まず、1番は不登校の理解についてです。冒頭でもお話がありましたが、本当に様々なきっかけ要因があって、一人一人全く異なる状況、またニーズということを実感しております。

それから、きっかけ要因については本人も自覚していなかったり、本人も誤認していたり、もしくは、保護者の方も分からないということも多々あります。そのため、私どものほうで、一人一人にフィットする支援を多角的に選択して、的確なアセスメントをすることが重要だと考えております。その多角的というところには、教育だけではなく福祉や医療などそういったところも含めて、多角的な支援が必要な場合が多いです。また、何が必要かということのアセスメントするためには、やはり本人や保護者との信頼関係が築けないと、本当の原因を把握することが難しいと考えております。そういったことで、一人一人に寄り添った活動というのを大切にしております。

2番です。支援情報不足の影響というところですが、不登校になると、先ほどの時乗先生のお話にもありましたように、保護者の負担が急激に増えます。また、保護者のサポートができる機関というのがとても少なく、それなのですが、保護者自身も混乱の中にあり、支援情報を自力で探し相談等に踏み出すことが困難になります。

ですので、市の教育委員会等で、ある程度ガイドブック的に教育委員会や学校、また、民間などの垣根を越えた支援団体の情報をまとめたものがあると、保護者の安心につながると思っております。

御参考にというところでは、海老名市のホームページにございます海老名市の不登校支援ガイドというものがございますので、ぜひ御覧いただければと思います。

また、本日資料としてお配りしておりますA4サイズのオレンジ色の写真が表紙にある冊子なのですけれども、こちらは「学びのビュッフェ」というイベントの報告になります。私どもフリースクールなどを運営しているメンバーで協力して、毎年開催している情報発信のイベントになります。こちらに、開催報告ということで、その日に参加していた様々な支援団体の紹介を載せて、こういった形でまとめてガイドブック的に使っていただけるようにということで考えて作成をしております。

それから不登校対応は、初動が重要ではありますが、すぐに支援情報につながることでスムーズに動けるようになるかとも思いますので、こういった資料を不登校になる前から手元に持っていただけるような状況が望ましいのではないかと考えております。

次に、③連携協働の必要性についてです。今までのお話にも関連いたしますが、学校と民間との連携というのが、私はとても大切ではないかと思っております。両方の立場で勤務をさせていただいた経験から強く思っております。そういうことでよりスムーズに、児童生徒の、また、保護者の支援が可能となります。現在も本当に在籍の小中学校の先生方とは密に連絡を取らせていただいて、こちらでの様子をお伝えしたり、保護者の困り感、本人のニーズなど、そういったところを日々連携させていただいております。

それから、そういった関係をつくっていくために、一つ情報提供させていただきたいのが、市町村の教育委員会主催の連絡協議会などの実施によって、顔の見える関係を築き、定期的また日常的に話し合える関係を築くということが大事なかなと思っております。

今までの例といたしましては、神奈川県、また、海老名市、座間市、厚木市ではそういった取組が行われておりますので、御参考にしていただければと思います。具体的には、海老名市のその連絡会では、教育長、支援センター長をはじめ、校長会の代表や教育委員会の担当主事、スクールソーシャルワーカーや、民間団体の代表者などが一堂に会して、テーマについて議論や提案を行い、具体的アイデアに結びつけていくということを行っております。

次に、論点Bに移りたいと思います。資料の論点B④ですが、校内教育支援センターの重要性について、情報提供をさせていただきたいと思っております。

文部科学省からの令和5年に発出されました、通称COCOLOプランというものにおきまして、校内教育支援センターの設置が推進されております。不登校児童生徒の対応のみならず、未然防止の役割も期待されております。しかしながら、その運営は自治体や学校に任されており、ノウハウが少ない現場では、その運営や枠組みづくりに課題を抱えることが多いのが実情です。

私どもは、2024年度から綾瀬市の教育研究所とタイアップいたしまして、神奈川県教育委員会の委託事業の一環で、綾瀬市全部の小中学校のオンライン教

育支援センターのサポートを行っております。

私ども民間の知見などを生かしまして、教育研究所や学校と日々相談しながら、現場の状況把握や課題解決に当たっております。

学校によって、状況や課題というのはもちろん異なるのですが、共通する課題の一つに人材不足が挙げられるというところを現場で実感しております。神奈川県では、県費によって人材配置がありますけれども、小学校は市町村に任されておまして、その経費の負担がなかなか難しいというところで、毎日常にそういった校内教育支援センターを配室するための人材配置が難しいというのが現状です。

それに加えて、不登校支援に知見がある人材というのが少ないというふうに感じております。ですので、支援員の養成や、さらに地域人材、こちらは、コミュニティスクールの取組、文科省のほうからも発出されていますが、そういったことや、教員志望の大学生などを支援員として活用し、人材不足を解消する、そして、そのための体系的な研修やケーススタディーの機会を設ける必要があると考えております。そのことによりまして、どの子どもも元気や意欲を培うことができる学校に近づくのではないかと考えております。

学校ではそういった対策を行うに当たり、先生方の負担も増える部分もあるかと思いますが、実際現場を回らせていただいていると、確実に効果が上がっていることを感じております。子ども一人一人の表に出ない心の様子を丁寧に理解しようとする姿勢が先生方の中で高まっていらっしゃるというのも感じますし、これは不登校のみならず、全ての子どもに必要な関わりだと現場で感じております。

情報提供は以上でございます。ありがとうございます。

○市長【萩原鉄也】 矢野様、ありがとうございました。

お二人の方には大変貴重な情報と御意見いただきました。今後の協議の参考とさせていただきます。ありがとうございました。

(2) 論点A

「欠席の続く子どもやその保護者の不安が少しでも和らぐために必要なこと」

○市長【萩原鉄也】 それでは、ここから、教育委員の皆様から御意見をいただきたいと思えます。

まずは、論点A「欠席の続く子どもやその保護者の不安が少しでも和らぐために必要なこと」について御意見をいただきます。御意見をいただける委員は挙手をお願いいたします。

それでは、濱田委員、よろしく申し上げます。

○教育委員【濱田光子】 学校と家庭とほかの専門機関が現状の把握、課題を分析して、今後の対策を短期間で解決することを目標にせず、丁寧に進めていくことが大切だと思います。子どもの生活する環境は、家庭によって様々で、特に経済環境の違いにより、家庭教育の考え方が異なることを理解することが必要だと思います。

また、学校教育において共通の課題を掲げ、学力、体力、生活習慣などを評価し、多くの知識を身につけていく上で、子ども自身の資質、性格には違いがあり、目標に向けて、それぞれがそれぞれのやり方、速さがあることを理解し、それぞれが努力することの楽しさ、頑張ったことを様々な場所で評価できる機会をつくることが重要だと思います。

子どもたち一人一人が持つ様々な力、音楽、芸術、体力、学力、知力、持久力、応用力、協調性などを生かせる場所を、教師が学校教育の中にそれぞれ見いだすことはとても難しいと思いますが、日々子どもに対面で向かい合う保護者は、その子の好きなことを見つけてあげられる一番近い存在です。両者が、背景や構造、継続的に連携して情報を共有して、対策について専門機関に相談をしながら、子どもの笑顔が生まれる時間を増やして行ってほしいと願います。

ただ、働き方改革が行われている昨今、物価の高騰等、生活を維持するために働く保護者の労働環境は余裕がある方ばかりではなく、全ての保護者が子どもの心の微妙な変化を敏感に察知することは容易ではないとも思われます。欠席の事由を学校側としてしっかり把握し、保護者と連絡を取り合い、関係団体などと相談をしながら、保護者の不安、子どもの心の変化を丁寧に見つめて行ってほしいと願います。

以上です。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございました。

続いて、いかがでしょうか。福田委員、お願いします。

○教育委員【福田雅宏】 お願いします。

不登校について調べましたところ、文部科学省の調査では、不登校の生徒数は年齢が上がるごとに増加し、中学生でピークを迎えるそうです。その類型は、6つに分類されるそうで、学校生活上の影響型、遊び・非行型、無気力型、情緒的混乱型、意図的な拒否型、その複合型だそうで、理由は様々あると思います。

例えば、人間関係ですとか、いじめですとか、学業の遅れですとか、あと大手学習塾によると、最近では、スマホやゲームのやり過ぎによる昼夜逆転型の生活をしているため学校に行かない子どももいるそうで、あとは、ヤングケアラーなどの家庭環境が影響している方もおり、あとは、勉強の遅れ、テスト結果があるそうです。それから、親から、これはある心理師さんの書いてあった文章なのですけれども、親からの子どもは何とかでなければいけないみたいな考え方の規範が強い家庭に、割と子どもさんの不登校が多いような傾向があるというふうに書いてありました。

それから、保護者の不登校に対する不安としては、子どもの学業の遅れですとか孤立、自殺につながるのではないかな等々、それを少しでも和らぐためには、やっぱり根性論ですとか叱咤激励ではなく、一步踏み出すきっかけをつくってあげる。今日、いらっしゃっている時乗先生や矢野先生のようなフリースクールであったり、学校内で子どもたちが行くことができる教室以外の行ける場所。先日、比々多小学校では、自分の教室以外でそういう場所があり、石田小学校では教室ではなく校長室で勉強している生徒が児童がいるとお聞きしました。

あと、いろいろなケースがあるので、心理学のお医者さんですとか、今もやっていますけれども、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの方々の活用等ですとか、あとは、大学の支援員、先ほど、矢野さんがおっしゃっていた大学生の支援員ですとか、あとは、不登校専門心理師さんというのもいらっしゃるようで、あとは、先ほどのスマホとかゲームの昼夜逆転型を支援してくれる久里浜に医療センターがあるのですよね。ネット依存の治療をしてくださるという方がいらっしゃるりとかするそうなので、そういう方たちと連携を取ったりして、あとは、書籍『学校に行けない子どもの気持ちがわかる本』なども活用してみたらいかがかなと思います。

以上です。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございます。

続いて、いかがでしょうか。

桑原委員、お願いします。

○教育委員【桑原公美子】 不登校の子どもやその保護者が不安に感じるのは、不登校という学校に行けないとか、行かないという状況に対して、負のイメージ、むしろ問題行動と捉えてしまう負い目を持つためではないかと思えます。

では、なぜ負のイメージを持つかといえば、将来を含めて、デメリットしか考えられない、メリットが見いだせないということにつながっているからだと思えます。

では、デメリットとは何かというと、不登校でなければ得られた、享受できた、例えば、集団生活の楽しさであるとか、友達との関わりの楽しさとか心地よさとか、あと学力の定着・向上、学びの楽しさということを失ってしまう。これがデメリットというふうに捉えている。またそれによって、将来の進路に不安を抱いたり、選択肢が狭まったり、先の希望が見いだせないということがデメリットになっていると考えられます。

子どもや保護者の不安を和らげるには、こうした負のイメージを薄める、もしくは、正のイメージへ転換する必要があるのではないかと考えます。そのためには、3つのことを保障する環境を整えることが必要だと思います。

まず、1つ目が集団生活や友達との関わりの楽しさや心地よさを保障することです。学校以外においても、それを保障できるような多様な場所を複数設定し、それを本人の意思で選択する機会を与えること、また、このような行動がイレギュラーではなく、多くの子ども、保護者にとって当たり前の選択肢、当たり前の生き方であることを、教員をはじめとする周りの人たちが理解すること。つまり、本人だけでなく周囲の人たちの意識改革が必要になると考えます。

2つ目は、学力の定着・向上の保障です。学ぶことは子どもにとって権利ですから、どこにどのような状況にあっても、それを保障する環境を整えることが、周りの大人の義務だと思います。学校に来られない状況であっても、同等の学習環境やレベルを提供するとともに、それを子どもや保護者が実感できる学習成果や学習評価というアウトプットを行うことも必要だと思います。

そして3つ目は、学びの楽しさを保障することです。先ほど述べた2つの保障

がそれぞれの別のものとしても対応できますが、この2つを合わせて相乗効果を生み出すこともできると思います。子どもが個々に学びの楽しさを追求することも、他者と協働した学びの楽しさを体験できることも、その両方が可能であり、それを子ども自身や保護者が自ら選択できる環境を整えることが必要だと思います。それは例えばICTを活用した疑似的、間接的な授業への参加などが挙げられます。北欧のデンマークでは、子どものありのままを受け入れながら育み、自分はどのように生きたいかを学ぶ教育を重視しています。その一つの例として、小学校進学に当たって、子ども自身に意見を聞き、まだ小学校に行きたくないという選択も受け入れられる仕組みがあります。

不登校という課題に限ったことではないかもしれませんが、どのような状況であっても、子どもが自らの学びと未来に選択できる肯定的な自己決定を保障するような人的、物的環境を整えることが必要だと考えます。

以上です。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございます。

続いて、いかがでしょうか。長塚委員、お願いします。

○教育委員【長塚繁昭】 既にもう皆様から話が出ていますけれども、不登校について、保護者の不安が子どもの不安定さにつながる、私もそう思います。具体的には、先ほど、時乗さんから話がありましたけれども、まず、学業の遅れ、進路選択上の不利益、それから、社会的自立へのリスク、そういう不安がやっぱり考えられます。それで、保護者の不安を和らげるための方策ということで、具体的にはどういうものがあるのか。少し考えてみると、これももう既にいろいろよりお話をいただいているのですが、学校内では、保健室登校だとか、個別支援教室だとか、先ほど矢野さんからあった校内支援センターだとか、また、学校の外では、先ほど今井担当部長のほうから説明がありましたけれども、伊勢原市の場合は、教育支援教室「やまどり」だとか「アオハルルーム」だとか「午後カフェ」だとか、また、民間では、今日お話しいただいた風の谷やIDEAなど、このような様々な場所があるということを知っていていくことが必要だと思います。

それから、進路選択上の不利益。これは、私も中学校の校長をやっていたので、やっぱり公立高校の入学選抜制度はどんどん変わっていくのですけれども、そういうことを理解していただく。また、不登校の生徒を手厚く支援する私立高校や通信制大学等の存在など、多様な学びの場があるということを知っていていくことがとても重要だと思っています。

今日、そういう意味では、お二人の方から、とても貴重な情報提供をいただいたと思っています。先ほど、時乗さんが言われた、必要なところに必要な情報をどう届けていくのかとか。矢野さんのほうからも、ガイドブック的なものが大事なんだというお話をいただきました。ガイドブックを見ると、この中に高校進学ミニセミナーというのがあって、ここで時乗さんが、公立高校についてお話をされて、こういうことを知っている、話聞いてみようかなと、そういうふうな、それをどう周知していくかということがやはり最大の課題なのではないかと思っていますので、今日は大きなヒントをいただいたように思います。ありがとうございます。

います。

子ども自身の不安ということについていえば、1人じゃないということをお伝え続けるとすることが必要なかと思っています。

私からは以上です。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございます。

私自身、「風の谷」にも訪れ、不登校の子どもの、様々な様子を見るにつけ、どの子どもも、成長への無限の可能性を秘めていると実感します。

教育委員の皆さんから出されたように、学校の中で夢中になれることを見つけられない子どもにとって、学校の外にも、自分のペースで安心して学べる場がたくさんあることが、私も重要だと考えます。

方策として、一人1台端末の有効活用や、本市の強みである地域の方を巻き込んだ学びづくりも、考えられるのではないのでしょうか。

また、保護者にとって一番不安になるのが「我が子の将来」だと思います。皆様から出されたように、関係機関・団体が一体となって、様々な安心情報が発信できれば、安心につながるのではと思います。

そして、不登校の背景には、心・精神の問題や家庭環境の問題など、教育だけでなく、心理・医療・福祉と連携しながら、本人だけでなく、家庭全体に働きかけが必要な課題も多いと承知しています。

教育委員会には、関係部局との連携・協働をさらに強め、健康医療に力を入れる本市の強みを存分に活かした取組を推進してほしいと考えます。

(2) 論点B

「どの子どもも「元気」「意欲」を培うことのできる「これからの学校」に必要なこと」

続いて、論点の2つ目について御意見をいただきます。

御意見をいただける委員、挙手をお願いいたします。長塚委員、お願いします。

○教育委員【長塚繁昭】 論点Aは、既に不登校状態にある子どもへの支援でしたけれども、私はこの総合教育会議のこの場で、新たな不登校が生まれないような、魅力ある学校づくり、これからの学校づくり、これに視点を当てたということは、まず第一にすばらしいと思いました。これからの学校に必要なことということで言えば、まずは子どもたちが学校の中で一番長い時間を費やす授業、この授業の充実が一番です。ただ、学校には、授業以外にもたくさんの魅力があるということも大切な視点だと思います。様々な行事だとか、部活動だとか、そういう集団での活動は子どもたちにとって魅力ある活動だと思います。

伊勢原市の学校では既に様々な取組がなされているのを先月、目の当たりにしました。11月14日の伊勢原中学校の研究報告会に伺ったのですが、一人一人を大切に、誰一人取り残さないような授業づくりをしていこうということを目標に掲げて取り組んでおられました。実際の授業の雰囲気を見ても、10年前とは違う。そういう温かな子どもたちの雰囲気も感じました。

それから、11月21日の石田小学校の研究報告会、ここでも授業づくりの大きな目標に、授業での雰囲気づくりの大切さを掲げていました。研究というのは、学力の向上にだけ目を向けがちなのですけれども、みんなが一緒に学ぼう、一人一人を大切にしよう。そういう雰囲気を大切にしようという研究の視点に感心しました。

先ほど、矢野代表からも話がありましたけれども、文部科学省は令和5年に「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」COCOLOプランを作成しました。その中では、学びの場の確保と学べる環境を整えるだとか、チーム学校で支援するだとか、学校をみんなが安心して学べる場所にするということ掲げて推進しているのだというような内容のものでした。

同じ令和5年にスタートした、先ほどの伊勢原中学校の研究テーマは、誰一人取り残さない学校づくりというものでした。「取り残されない」と「取り残さない」の違い。いろいろな考え方があろうかと思いますが、私は「取り残さない」というフレーズには、私たち大人が主体的に子どもたちを支えていこうという気持ち強く表れていると感じています。今後は、子どもたちだけでなく、先生にとっても楽しい学校、魅力ある学校、それをどうつくり上げていくか、それが大切になってくるのではないかなと思います。

私からは以上です。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございます。

続いて、いかがでしょうか。桑原委員、お願いします。

○教育委員【桑原公美子】 私の意見としては、不登校の児童生徒を必ず学校に戻さなくてもいいのではないかなと思っています。先ほど基調説明でもありましたが、令和7年の全国学力・学習状況調査の結果で、自分のよいところがあるとか、自分のよいところは認めてくれているという質問に、一、二割の子が否定的に答えていたという結論があったかと思っています。つまり、それだけの人数の子どもが学校を自分の居場所だと思えていないという事実が数字として表れていると思います。

また、不登校に関する調査結果の説明があったと思いますが、様々な支援によって不登校を改善する子どもがいる一方で、新たに不登校になる子どももいて、結果的に不登校の子どもの数が増加傾向にあるという分析結果でした。

つまり、現状そして今後において、学校に行かないという状況は特殊な状況ではなく、多くの子どもがたどるもの、たどる可能性があるものだという前提で捉えることが必要なのではないかと考えます。

そして、教員、先生は自分が選択して、学校という場を選んできていますが、子どもは別に選択して学校に行く、いるというわけではないという視点から捉え直すと、どの子どもも元気・意欲を培うためには、子ども自身が自己決定をした上で進むという、自己決定の機会が必要なのではないかなと思います。つまり、自分で選ぶことで、前に進めるのではないかと考えます。

そのためには、子どもが自らの居場所や学びをつくり出せる場を選択できるようにすること、そして同時に、多様な状況にいる子どもの情報を、学校が一元化

というか集約して、それとともに、いつでも、学校、教室を選択できる状況をつくっておくことが必要なのではないかと思います。

そこで、学校の具体的な役割として、2つのことが考えられます。

まず、第1に、学校内外の多様な居場所と学びの場の提供と把握です。子どもが自分の居場所と学びをつくり出せる場を、教室、学校以外でも選択できるよう、場所を提供するとともに、その情報を把握、集約することです。学内の保健室であっても、学外のフリースクールであっても、学校と同等の居場所と学びの質が担保されるような環境づくりや関係づくりを行うというのが役割の1つ目です。

2つ目の役割として、子どもが選択する全ての場所・環境をつなぐハブ的な役割です。個々の子どもや保護者が選択する学内外の様々な場所、環境と情報共有や連携をしながら、時間をかけてつなげていく、ハブとしての役割を担うことです。ハブとは、ネットワークやシステムにおいて情報やデータの集約・配信を行う中心部分のことですが、子どもが自分がどこでどのような状況にいても、その周囲の状況ネットワークについて、学校が中心になって把握調整してくれていること。それが子どもの安心感と肯定的な選択につながると考えています。子どもが元気・意欲を持てる場所と内容を、子ども自身が肯定的に選択できるような環境を整える。そのための中心的な存在になることが、これからの学校に必要なだと思います。そして、そのためには、教員のコーディネーター力向上が必要になると考えます。

以上です。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございます。

続いて、いかがでしょうか。福田委員、お願いします。

○教育委員【福田雅宏】 お願いします。

どの子どもも元気・意欲を培うことのできるこれからの学校にしようということで、学校が楽しいと思えるようなクラス編成を考えること。そして、その子に合わない学校に通っている場合は、学校区の違う学校に通うことができるような体制整備も大事だと思います。

それから、学校で子どもが興味を持てることを模索すること。例えば、子ども科学館がありますので、その先生に来ていただいたりとか、あとは、高校とか大学の教育で、ラグビーとかやっているような、スポーツ推進をやってみたり、あとは工場見学に行くなど、その子自身が将来のビジョンを想像できるような体験ができるように、校外の方々との連携も大事だと思います。そういった体験から、将来を想像し、具体的な目標を立てる。子どもが自ら主体的に考えられる環境をつくるために、現場の声や映像の使用なども大事かと思っています。

それから、保健室などのいわゆる教室以外でも、子どもが安心できる場所をつくるような配慮も大事かと思っています。不登校への対応は、家庭と学校などが連携することが大切なのですが、外部の助けも必要です。例えば、今日いらっしやってくだった時乗様の風の谷ですとか、矢野様みたいなNPO等のフリースクールやオンラインのフリースクールも利用できます。

また、保護者親の会やカウンセリングなど、不登校を支援する機関を利用して

保護者の負担を減らすことも大事だと思います。学校だけで解決しようとするのではなく、地域と行政、他機関との連携が重要です。例えば、教育センターや教育相談主任、コーディネーター、スクールソーシャルワーカー等との連携を継続することが大事だと思います。

不登校の対応に正解はなく、多種多様なので、お子さんの気持ちに寄り添いながら、親子ともに無理なく過ごせる環境をつくってあげることが大切です。

先ほど、桑原先生も仰っていましたが、学校に行くことだけを目的にせず、お子さんが自分らしく生きる方法を一緒に探していくことが大事だと思います。

以上です。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございます。

続いて、いかがでしょうか。

濱田委員、お願いします。

○教育委員【濱田光子】 お願いします。

私は、企業人として、義務教育を終えた社会人が会社に入ってくるのですが、やはり今どこのものづくり現場も人が足りません。というのは、入社してもすぐ辞めてしまうという方について、どうしてなのかなといつも思っていて、義務教育の時には不登校でもないし、しっかり学校に行って学歴もある、という青年たちがなかなか多種多様な社会のなかで、自分の可能性をもっと高める場所が欲しいということで、入社してすぐに転職活動をするというのが当たり前の世の中になってきて、そのときに公教育の在り方ってどうあるべきかと思うのです。

私は伊勢原市民として育ってきまして、意欲・元気という言葉は、やはり伊勢原で生まれたからこそ、伊勢原で過ごす、伊勢原で働く、生活することの楽しさを学校の中で見いだせるような学校教育であってほしいと願います。

そのためには、今進められていますICT教育に重点を置き過ぎず、地域の特色を生かしながら、集団での活動の楽しさを体験していく場面を増やしていく学校づくりが進むことを期待します。伊勢原市のすばらしい自然環境、社会環境を活用し、各学校で特色ある教育現場を創造して行ってほしいと思います。

地域の中で暮らす子どもたちが、学校にいる時間以外のところでもたくさんの方々に見守られ、声をかけられていることを認識して、様々な場面で疑問に思ったことを、学校で疑問に思ったことを学校で学び、理解していく過程で、楽しいと思える機会が多くなればと願います。

成長過程の柔軟な子どもたちの敏感な感受性を、知りたい、覚えたいという欲求につなげて、学ぶ、体験することで、未来に対する意欲が生み出されるのではないのでしょうか。

指導者が子ども一人一人に丁寧に向き合える時間、心の余裕が持てることを望みます。ICT教育が進み、今後も授業の内容、評価等も効率化が進むと思われませんが、子どもたちの各人の声、顔、表情を直接感じることも、さらに求められていく時代ではないのかなと思います。

以上です。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございます。

ありがとうございました。

何が正解か不透明なこの時代、子どもたちに、いわゆる優等生だけでなく、自分の思いや考えを持ち、自分の生き方を自分で選んでいくという、たくましさ

が求められています。そんな中、インターネットを使って様々な情報・知識を得られる今、学校でなければ得られないもの、学校ならではの魅力とは何だろうと考えます。それは、皆さんから出されたとおり、授業だけでなく、様々な活動による実体験から得られる学び、様々な人と関わる中で、自分とは違う考え方、生き方に出会うことなのかなと考えます。

教育委員会には、こうした学校ならではの魅力をどんどんアピールしていただきたいと思っております。ターゲットとしては、特に小学校に入学する前の保護者へのアピールが重要ではないでしょうか。

先ほど事務局からの説明にあった、小学校低学年からの不登校の増加が気になっております。小学校と幼稚園、保育園等の連携強化、そのためにも、教育部とこどもみらい部とのさらなる連携強化をお願いいたします。

やはり、学校の先生が生き生きとやりがいを持ってやっていると、常に笑顔でいると、その笑顔って子どもにうつるじゃないですか。子どもへうつると、子どもの笑顔というのは家庭へ、そして家庭から地域がやっぱり笑顔になる。伊勢原が笑顔になって、伊勢原が元気になるという好循環を生み出せるよう、引き続き、よろしく願います。

それでは、ここまでの協議を踏まえて、教育長から、総括的な御意見をいただきたいと思えます。

宮村教育長、よろしく願います。

○教育長【宮村進一】 市長、それから教育委員の皆さんには、それぞれの視点から御意見をいただき、ありがとうございました。また、時乗様それから矢野様には、本当にお忙しい中、御出席をいただき、貴重な情報と御意見をいただきました。ありがとうございました。

不登校については、学校に来られない子どもをいかにみんなで支えていくかが重要なのですが、私はもともとずっと中学校で仕事をしていまして、やっぱり学校が好きです。ですから、当然、今、不登校になっている子どもたちには、学校外でのいろいろな学びも奨励したいし、認めていきたいとは思いますが、それ以上に、学校が、伊勢原の小中学校が全ての子どもたちにとって、わくわくできる場所であってほしいと思えます。ただ、一方で、学校はわくわくだけではありません。学校というのはいろいろ苦しいこととか、つらいこともある。どきどきもしながら、それを自分で乗り越えていけるような、そんな学校を目指し続けてほしい、自分も一緒になって目指したいというふうに思っているところです。

私は、不登校に関する取組、施策事業を進めるなかで、3つの視点で、1つは既に不登校の状態にある子どもへの継続支援、「大丈夫だよ」「何とかなるよ」という安心、情報をいかに早くきっちり届けられるかという部分では、今日おい

どり」それから「アオハルルーム」、みんなで連携しながら情報を届けられる仕組みを早くつくっていかなくてはいけないなと思っています。

先ほど、厚木市、海老名市、綾瀬市、いろいろな事例を情報提供していただきました。ただ、伊勢原が特に遅れを取っているわけではないと思います。まだ、県内でもごく一部の自治体しか、そういう動きはできていないと思うので、ぜひ伊勢原も、どんどん進めていければと思っています。

今年度に入って、事務局と一緒に私は本日お越しいただいたお二方の団体を含めて7団体へ顔の見える関係ができればということで訪問してきました。もしかしたら、ほかにもそういう団体が市内にあるのかもしれませんが、まずは、そういったところとしっかりとした仕組みをつくっていければなと思っています。

2つ目に、長い欠席に至る前の早い対応ということでは、学校の中でも、そういう居場所、教室以外の居場所をつくってあげれば、教室には行けないけれども、という子を何とかそこで引き止められるのではないかなど。そして、そこには教員だけではなくて、いろいろな人を巻き込んで、地域の方を巻き込んで、休み始めの子どもへの支援を強化していきたいと思っています。

そして、3つ目が一番肝だと思っているのですけれども、学校ならではの魅力を充実させるということ、冒頭に伊勢原ならではの強みを申し上げましたけれども、地域あるいは伊勢原らしい特色ある教育、学びについて、地域の人たちと一緒にになって、いかに持続していくかということだと思います。それぞれの学校の運営協議会や地域学校協働活動を一緒にますます充実させていければと思っています。

そして、小学校低学年段階の不登校のお話がありましたけれども、これも伊勢原ならではのようですが、市内の幼稚園やこども園、保育園との連携、それから、小学校、中学校の接続についても、小中一貫教育の先進事例も参考にしながら、研究、検討を進めていきたいと思っています。

さらに、既に不登校になっている子の学びということであれば、鎌倉市や大和市で、学びの多様化学校として面白い教育課程を編成している学校がありますので、その成果も研究し、検討していかなければいけないなと思っています。

本日は、事務局側で、こどもみらい部の職員にも出席いただいていますけれども、例えば「アオハルルーム」もそうですが、いわゆる不登校の子が抱えるいろいろな困難を軽くしていく上では、相談活動が欠かせないわけで、こどもみらい部との連携、それから保育園、こども園との連携というのを考えたときには、やはり、こどもみらい部の皆さんと一体となって、取り組んでいきたいと考えています。

今年度中には、教育委員会として、今日議論いただいた意見も反映しながら、不登校に関する取組の基本的な考え方と今後の方向性等を盛り込んだ基本方針をつくり上げ、今後、具体的な施策展開を図っていきたいと考えております。

本日は、どうもありがとうございました。

私からは以上です。

○市長【萩原鉄也】 ありがとうございました。

まずは、教育委員の皆様、ありがとうございます。

そして、今日はお忙しい中、お越しいただきました、時乗様、矢野様、本日はありがとうございました。改めて感謝を申し上げます。

様々な御意見を伺う中で、喫緊の課題である不登校の捉え方、現状と課題、対策の方向性について、私自身も認識を深めることができました。教育委員会では本日議論された内容について、学校はもちろん、保護者をはじめとした市民に発信し、市全体で認識共有を図ってください。

さて、本市では、こども基本法の趣旨を踏まえて、本市の次代を担う子ども、若者が幸福な幸せな生活を送ることができる社会の実現に向け、子ども施策を総合的に推進していくために、全ての子ども、若者や、子育て当事者等を対象とした令和7年度から令和11年度を計画期間とする「伊勢原市こども計画」を策定しました。不登校対策もこの計画の一環であり、学校や、教育委員会だけでなく、市全体で当事者である子どもたち自身の声を聞きながら、推進すべきものであると考えております。

伊勢原市は今後も、子どもを育てやすいまちをつくっていかなくてはならないと思います。不登校対策もその一環です。そのために、今日も事務局として職員が出席していますが、職員が仕事にやりがいを持って、生き生きと働ける、そういう環境じゃないといけないと思います。それが、ひいては市民の方に還元し、市民の皆様の元気に繋がっていくと思います。

今後も引き続き、教育委員会の皆様と力を合わせて「こどもまんなか社会」の実現に向けて取り組んでまいりますので、引き続き、お力添えをお願いいたします。

本日はありがとうございました。

----- ○ -----

閉会

○教育部長【熊澤信一】 改めまして、皆様、ありがとうございました。本日、予定しておりました日程は全て終了いたしました。

これをもちまして、令和7年度の総合教育会議を終了といたします。

お疲れさまでございました。

----- ○ -----

午後2時53分 閉会